

人と人、内と外を繋ぐ憩いの場

～球磨村に設ける地域内外多目的交流拠点～

熊本高等専門学校/本科一年板東和寿

地域課題の選択 ①「令和2年7月豪雨の被災地における地域の持続に必要な取組みについて」

1. はじめに

生まれてから3歳になるまでの間、球磨村で過ごした。当時の記憶は数えるほどしか残っていないが、紛れもない故郷であることは確かだ。そんな球磨村が令和2年7月豪雨により大きな被害を受けた。ボランティアに行く中で、故郷である球磨村に何か貢献できることはないかと考え始めた。このアイデアコンテストでは、球磨村の現状、そしてそれに対する解決策を政策として提案したい。

2. 現状分析/調査内容

球磨村の小学6年生、中学生全学年に行った独自オンラインアンケート調査より

熊本県ホームページにある、各年の「熊本県推計人口調査結果報告」によると、2015年～2019年を見ても人口減少は起きており、五年間で3698名から3307名になり、391名の減少したことがわかる。また、2020年の豪雨災害によって球磨村内の人口が2443名となり、864名(34%)の人口減少が確認できる。以前から進んでいた人口減少に豪雨災害が拍車をかけたことが分かった。

次に、球磨村内にいる小学6年生、中学生にオンラインアンケートを行った。「将来どこに住むか」という問いに対して、62%が「将来、村外に住む」と回答した。「村内に住む」と回答した生徒はわずか4名(7%)だった。このことから今後さらなる若年層の減少が予想される。また二つ目の問いである「球磨村で生活していて不便なことは何か」という問い(自由回答結果を分類)に対して、「行きたいお店がない」に分類される回答が25件(41%)、「不便なし」に分類される回答が14件(23%)となった。件数は少ないが「災害に弱い」、

「遊ぶ場所が少ない」と回答した生徒もいた。さらに、三つ目の問いの「球磨村にあつたら良いと思うものは何か」(自由回答結果をもとに分類)に対して、「お店」に分類される回答が20件(33%)、「ショッピングモール」に分類される回答が8件(13%)となった。件数は少ないものの、「防災拠点」、「カフェ」という回答もあった。

二つ目、三つ目の問いから、球磨村の小中学生は多くの人が集まり、友達と遊びに行けるお店を求めていると考えられる。また、「カフェ」など豊かさを求める声もあることが分かった。

神瀬地区の住民への聞き取り調査より

村民のより詳しい声を知るため私が住んでいた、神瀬地区の住民6名に聞き取り調査を行った。「球磨村の好きなところは何か」と聞くと、「人との繋がりが身近に感じられること」との返答があった。また「地域に足りないもの、欲しいものは何か」と聞くと、「今後も同じ災害は発生するため、避難所が必要。みんなの家のような避難所」、「若者」、「パソコンのみでできる新しい仕事」との返答があった。

住民への聞き取り調査から、住民が求めているもの、球磨村に必要なものは、「人口流出への対応と新しい仕事」、「すぐ避難ができる避難所、住民同士の共助による避難」ということが分かった。

小中学生に行ったアンケート調査、神瀬地区の住民に行った聞き取り調査をもとに、「人口減少の抑制」、「児童から大人までが集まって楽しみ学べる空間」、「防災・減災における共助関係の構築・維持」を今回取り組む課題に設定する。そして村の理想像は、「人口減少が抑えられ、人と人が繋がり、災害に柔軟に対応できる村」として解決策を考える。

3. 課題に対する解決策と具体的な政策アイデア

今回の課題を解決し理想像へと繋げるプロセスとして「地域内外多目的交流拠点」を基点とした「人口減少対策」、「防災減災における共助関係の構築と維持」、「児童から大人までが集まれて楽しみ学べる空間の設置」を提案する。地域内外多目的交流拠点は、常時、地域の住民同士や地域外の人と地域住民との多様な交流が行われ、災害等の緊急時には避難所となる場所である。

多目的交流拠点で行われる地域内交流について

地域の結びつきを強め、災害に強い村を作るため多様な地域交流会を企画する。具体的な内容として、定期的に行われる食事会、災害時備蓄チェック会、小中学生のための勉強会、地域展望についての会議などがある。また、このような交流会や小中学生が趣味・学習に取り組める場を設けるため、多様な設備・交流環境を設ける。具体例として、音楽・芸術スペース、自習スペース、インターネットスペース、リビングスペースなどがある。多くの設備、交流環境で様々な地域交流会をすることにより、お互いの共助関係が生まれ、また強化される。これにより、災害発生時等の緊急時、迅速な対応画家能になると考えられる。また、地域間の交流により、自動、生徒が一度地域を出たとしても、戻りやすい環境を用意することができる。

多目的交流拠点で行われる地域外交流について

地域の人と外部の人が交流できる機会を増やし、相互理解を深めるため、地域外の人とその地域の雰囲気味わえる場を設ける。具体例として、宿泊可能スペース、地域の交流会に参加できる機会をつくる。これにより移住したい人がお試しとして村に滞在でき、移住の促進につながると考えられる。

地域内外多目的交流拠点整備に向け次の三つのフェーズを行う。

(1) 交流拠点実現可能性検証フェーズ

多目的交流拠点における交流活動の実現性を調査する。活動の内容として、地域の小中学校を対象に、地域を楽しむワークショップを開催し、学びと遊びを軸に地域内で何ができるか検討する。また、リモ

ート技術を活用することで、地域外との交流が可能か検証する。

(2) 交流拠点準備フェーズ

多目的交流拠点建設に向けた準備を行う。活動内容として、多目的交流施設の建設に向けた設備仕様を検討する。また地域で行う交流会を特定、実験的に開催する。さらに、交流拠点の建設並びに交流会実施に伴う効果を試算し費用対効果を調べる。その後、費用対効果をもとに建設、交流会実施の検討及び判断を行う。

(3) 交流拠点建築・運用フェーズ

多目的交流拠点の建設並びに地域交流会の開始と運営を行う。

4. まとめ・今後の展望など

今回、小中学生に行った独自のアンケート調査や、住民に対する聞き取り調査を行うことで、インターネットに公開されているデータからは分からなかったことが見えてきた。これからの発展として、地域内外多目的交流拠点整備に向けて住民の声を取り入れつつ、より具体的な活動を考えていきたい。また、地域ごとの専用連絡ツールを作り、常時利用することでより人と人の連携を強化し、災害時に迅速に対応できるようになると考えられる。そして、「人口減少が抑えられ、人と人が繋がり、災害に柔軟に対応できる村」の実現へとつなげたい。

参考文献

アンケートおよび聞き取り調査

2021.8.29 渡小学校、一勝地小学校六年生

2021.9.01 球磨中学校生徒

2021.8.16～8.17 神瀬地区の住民

熊本県推計人口調査結果報告 2021 年版

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/20/120389.html>